

運動有能感を高める小学校体育授業の実践Ⅲ

—スポーツ鬼ごっこの追跡を通して—

(高知県スポーツ鬼ごっこ連盟・鬼ごっこ総合研究所客員研究員) 山崎功一

Practice of elementary school physical education lesson to enhance exercise competence3 -Through tracking grade game (sports onigokko)-

Kochi Sports Onigokko Faderation・Onigokko research institute guest researcher Yamasaki, Koichi

キーワード：運動有能感 スポーツ鬼ごっこ 小学校体育

I. 研究目的

学習指導要領改訂では、心と体を一体として捉え、生涯にわたる心身の健康の保持増進や豊かなスポーツライフの実現を重視し、体力や技能の程度、年齢や性別及び障害の有無にかかわらず、運動やスポーツの多様な楽しみ方ができるように配慮されている。

しかしながら、以前より積極的に運動する児童とそうでない児童の二極化への指摘や体力低下傾向が問題となっている。新学習指導要領の内容の取扱いにおいても、「特に、運動を苦手と感じている児童や、運動に意欲的に取り組まない児童への指導を工夫するとともに」と運動を苦手と感じている児童や意欲的に取り組まない児童への指導について追加されている。さらに、「ゲームについては、味方チームと相手チームが入り交じって得点を取り合うゲーム及び陣地を取り扱うゲームを取り扱うものとする」と積極的に運動する子どもとそうでない子どもの二極化への指摘を踏まえ、運動の魅力に触れることができるよう、相手との攻防を楽しむ等の指導内容が示されている。

運動に対する愛好的な態度を育むには、児童自らが運動を行いたい、チャレンジしたいという思いを高めること、つまり内発的動機づけを高める必要がある。内発的動機づけを高める視点として、岡澤ら(1996)は「運動有能感」を高めることを提唱している。運動有能感とは、「身体的有能さの認知」「統制感」「受容感」の3因子から構成されている。岡澤らは運動有能感の構造を明らかにし、小学校から大学生まで使用可能な「運動の有能感測定尺度」を作成している。さらに、運動に対する内発的動機づけと運動有能感には正の相関関係があるとしている。

そこで本研究は、児童の運動有能感の変容をみるために「運動の有能感測定尺度」を授業で具体的に活用し、その要因を分析することによって、具体的な成果になるのではないかと考えた。そして、運動を積極的にする児童とそうでない児童の傾向を明らかにするために、ゴール型の鬼ごっこを教材化し、単元実践を試みる。さらに、異なる学校・学年と、比較分析をおこなうことによって、本教材の有効性を確認することを目的とする。

II. 研究方法

1. 授業研究

(1) 対象

2016年度高知市立K小学校4年生1学級。

2018年度高知市立U小学校4年生1学級。

2020年度高知市立U小学校3年生1学級。

(2) 教材

ゲーム領域(ゴール型・スポーツ鬼ごっこ)

1単元5時間(3実践同様)を対象とした。

(3) 期日

2016年11月。2018年10月。
2020年11月

(4) 教師

男性教師が授業を担当した。

(5) 調査項目

運動の有能感に関する調査

運動有能感の変容をみるため、単元前後にアンケート調査(12項目)を実施し運動有能感の変容を整理した。

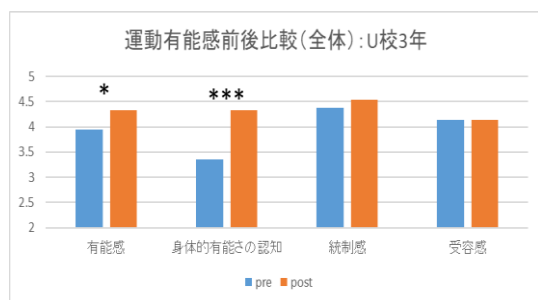
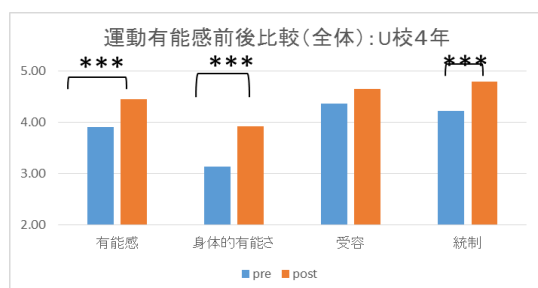
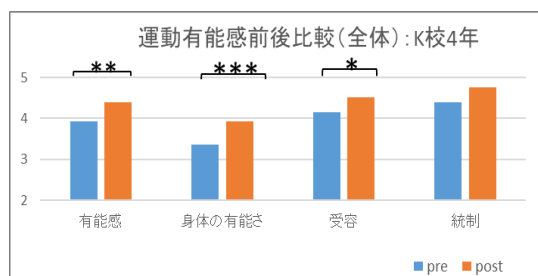
(6) 分析方法

統計処理はSPSS統計パッケージで統計処理した。

III. 研究の結果と考察

(1) 運動有能感に関する調査 (全体)

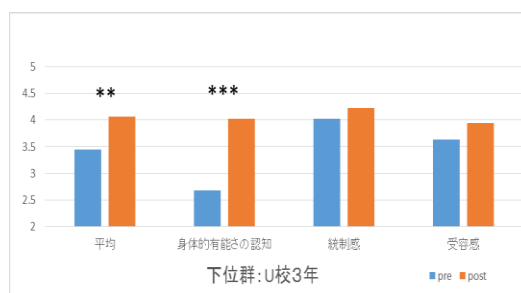
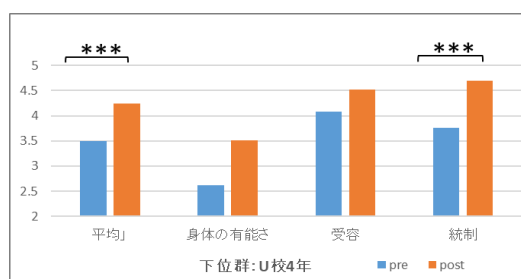
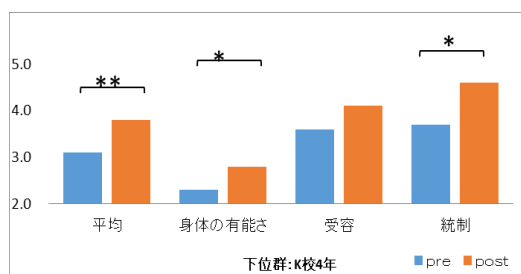
単元前後の有能感の全体の変容を表したものが下記の表である。有能感全体では、全ての学校学年で有意の差がみられた。特に、『身体的有能さの認知』は有意に高まっている。以上のことから、スポーツ鬼ごっこは、誰でも楽しめ、経験値を増すことで、運動に対する自信につながる事ができたと考えられる。



(2) 運動有能感 (下位群)

単元前後の有能感の下位群の変容を表したものが、以下の表である。有能感全体では、全ての学校学年の下位群で有意な高まりがみられた。以上のことから、スポーツ鬼ごっこは、運動が得意でない

児童でも、「タッチされても復活できる」ことや「宝をとることやタッチする」ことの楽しさが運動に対する自信につながる事ができたと考えられる。



IV. 結論

スポーツ鬼ごっこ教材では、中学年において学校や学年が異なっても、児童の運動有能感の高まりがみられる。このことは、学校や集団が違っても、技能差に関係なく誰でも楽しめることが、運動に対する自信につながったのではないかと考えることができる。

今後は、運動有能感が高まるための要因は何であるのかを、さらに検証していく必要がある。

引用・参考文献

- [1]文部科学省(2017), 新学習指導要領解説, 文部科学省.
- [2]岡澤祥訓・北真佐美・諏訪祐一郎(1996), 運動有能感の構造とその発達及び性差に関する研究, スポーツ教育学研究, 16(2):145-155.